〈研究ノート〉

日本伝統文化を背景とする「芸術」への育み
―合気道家多田宏インタヴュー―

The Formative Environment Leading to “Art” Rooted in Japanese Traditional Culture: An Interview with Aikido Master Hiroshi Tada

向井　晃子
MUKAI Akiko

Summary

Aikido master Tada Hiroshi, a direct disciple of Aikido founder Ueshiba Morihei and a key figure in promoting Aikido both domestically and internationally after the war, practices Aikido as an "art" rooted in traditional Japanese culture. This research note includes previously unpublished excerpts from an interview conducted in 2022, which explore his upbringing before he came to view Aikido in this way. This interview, based on the author's concerns about the categorization of Japanese art in modern times, was conducted with the intention of providing insight into contemporary concepts such as "Japan," "Japanese culture," and "art and other forms of art rooted in Japanese culture." For more details, please refer to my previous research note "The Crossroads towards 'Art' against the Background of a Japanese Cultural: Interview with Hiroshi Tada, Aikido Master." This research note includes the interviewee's "prewar life and elementary school environment," "travel to Manchuria," " childhood lessons," and "faith and religious experiences at home" before his encounter with Aikido. In addition, this research note includes the topic "The Overseas Spread of Aikido in Italy," which is related my essay "The Popularization and Overseas Expansion of Aikido: A Study on the Transformation and Dissemination of Japanese Culture in Modern Era."

キーワード
日本文化、近代、武道、芸術

Ⅰ　はじめに

合気道家多田宏は、合気道開祖植芝盛平の直弟子で、戦後に日本とイタリアを中心として国内外で合気道普及に努めた重要人物であり、合気道を日本の伝統文化を背景とした「芸術」と捉えて実践している。本稿は、多田がそのように合気道を捉えるようになる以前の生育環境がどのようにあったのかという視点から、2022 年に実施したインタヴューの未公開部分より記録を抜粋し、公開する。本インタヴューは、筆者の日本近代の芸術のカテゴライズに対する問題意識の下、同時代の「日本」や「日本文化」、「日本文化を背景とする美術および芸術」といったものを考察する手掛かりとなることを意図して実施された。これについての詳細は拙稿「日本文化を背景とする「芸術」への岐路－合気道家多田宏インタヴュー－」を参照されたい[1]。本稿では、インタビュイーが合気道と出会う以前の「戦前の暮らしと小学校の環境」、「幼少期の習い事」、「満州への旅行」、「家庭での信仰や宗教の経験」を掲載した。それに加えて、拙論考「合気道の一般普及と海外展開―近代における日本文化の変容と伝播に関する一考察―」と関連する「イタリアでの合気道海外普及」について収録する[2]。公開する内容について、インタビュイーの確認と了承を得ているが、当然ながら、本稿の責任は筆者にある。

Ⅱ　インタヴュー実施概要とインタヴューの記録

2.1　インタヴュー実施概要

合気道家多田宏インタヴュー第 1 回
実施日：2022 年 12 月 23 日
実施場所：東京都武蔵野市月窓寺和室（書道室）にて
インタヴュアー：向井晃子
書き起こし：向井晃子
備考：本インタビューは、多田宏『合気道に生きる』（日本武道館、2018 年）を参考にしつつ、詳細を聴取する方針を取った。（当初、複数回実施する予定のインタビューの第 1 回であったが、インタビュイーの多忙により現時点で第 2 回は実現していない。）

凡例：
・（　）内は、補った言葉である。
・XXX は、録音が不明瞭な部分である。
・本インタヴュー内で示される多田宏『合気道に活きる』（日本武道館、2018 年）については、『合気道に活きる』と表記する。

---

[1] 向井晃子「日本文化を背景とする「芸術」への岐路－合気道家多田宏インタヴュー－」年報 Promis vol.1(2022) No.1、神戸大学、2023 年、123-139 頁。
[2] 向井晃子「合気道の一般普及と海外展開―近代における日本文化の変容と伝播に関する一考察―」年報 Promis vol.4(2025)、神戸大学、2026 年、掲載予定。

2.2　インタヴュー記録

＊戦前の暮らしと小学校の環境

向井：先生が自由が丘で住まれた家は、木造の平屋の家だったのでしょうか。

多田：あの辺は、丘の上だったんです。うちが買った頃、昭和 7 年、まだ下の方（に家は)、ほとんどなくて。多摩川で、あの頃読売で、多摩川というのは東横線、東横線よく知ってます？

向井：あ、東横線は、はい。

多田：東横線で、自由が丘があるでしょう、隣が田園調布、それから多摩川園っていうのがあったんです。そこの河原で、花火があったんです。三尺玉が上がったりしたんです。それがうちの縁側に座って見れたんです。だけどそのうちに前が、そういうところに家が立ち始めて（塞がった)。だけど、ウチのちょっと横の方行くと野っ原だったんです。まだ田舎だったんです、自由が丘なんて、すごく。それで、たしか東横線ができて少したったぐらいです、昔は玉電の三軒茶屋の方から歩いて入っ・・、あの、車で入ったっていうぐらい。だからすごい（田舎で)、碑衾（ひぶすま）村っていったらしいんですけど。

向井：ひぶすま・・

多田：そう碑衾（ひぶすま)。電話番号なんかも確かそうでした。ものすごく田舎だったんです。それから田園調布、今度、お札になる渋沢栄一、1 万円札になる人。彼がつくるじゃないですか[3]。だから田園調布を買おうか、自由が丘を買おうか、という・・、だけど自由が丘は第一生命の関係で、父親は第一生命に行ってたわけだから、わけてもらったんです。

向井：はい。その頃はまだ、電気とかガスとか・・

多田：ああ、もうきてます。水道はね、井戸があって。こういうドラム缶でのタンクなんです。それが自由が丘の駅から見えたんです、高台だから、当然。自由が丘っていうのは石井漠さんという舞踊家たちが踊ったときに、自由が丘って名前つけたっていう[4]。本当に丘の上なんですよ。今は、家が建ってしまってわからないけど。

---

[3] 田園調布は、渋沢栄一が「田園都市」構想に基づき、1918 年に設立した田園都市株式会社が手がけた住宅専用市街地。朝日新聞「渋沢栄一の精神引き継ぐ田園調布の 100 年　住民が維持する緑の景観」https://www.asahi.com/articles/AST2B1H9WT2BOXIE00PM.html、2025 年 11 月 8 日最終閲覧。

[4] 石井漠は日本のモダンダンスの先駆者。産経ニュース「石井漠と崔承喜　李香蘭も習ったモダンダンス」 https://www.sankei.com/article/20170122-Y2DANRUMDFM37LC33XFMTGVIM4/2/、2025 年 11 月 8 日最終閲覧。

向井：その井戸は水汲みが必要な・・

多田：ああ、ポンプで。そのかわり、丘の上だから、ものすごく深いでしょうね。

向井：ああ、そうですよね。はい。

多田：うん。それでウチは大変、坂だった。すごく広い家じゃないけど、それでも 300 坪くらいです。もうあの辺みんな、300 坪くらい。

向井：お家の間取り自体も、大きなお家だったんですか。

多田：うーん、部屋はいくつっていう・・、玄関があって、入ってすぐぐらいに女中部屋があって、こっち側に台所があって、風呂場があって、XXX あって、茶の間があって、屋敷があって、離れがあって、それで応接間もこっちもあって、今のうち、今のマンションとか、そういうのよりは広いけど。

向井：はい。

多田：それで周りにはずっと桜や、それから、シイや樫や、ずーっとあって、向こう、正面のつきあたりにヒマラヤ過ぎが 4 本あった。大きな柿の木が、柿の木が 4、5 本あったなぁ。あと桜の、こっちに桜があって、7、8 本あって、鳥やなんかも、そりゃぁ・・（沈黙 3 秒）まあ・・、静かな田舎町って、夜なんか、音なんか何もないから、静―か。だって今ここでも、井の頭公園のあっち行くと、夜になると音は何もないです。隣の公園があるから。公園が静かだから。

向井：では、水はその井戸のポンプで・・

多田：はい。だけど、ガスはありました。電気もありました、もちろん。だけどストーブや暖房はなくて、私は子供の頃に茶釜にこういう石炭ストーブを入れてそれで煙突がこう這ってって、廊下をずっとぬけて、そっち側にブドウの棚があったのだけどその横の方から煙突の煙を出すようにして、暖房なんかはとってました。うん。例えば、実際に眠る、離れとかそっちの方いくと、そんな暖房なんかなかった。火鉢です、昔は。それで、庭には池があったんだけど、このぐらい（50cm くらいを両手で示すジェスチャー）凍ったんです。

向井：えぇっ。

多田：僕らが乗って遊んだって、全然支障ない。ものすごく寒いんです、昔は。今より。

碑文谷公園（ひもんやこうえん）というのが、小学校の先の相手の方にあったけど、（氷の）上に乗るんです。危ないからとよくみんな注意されたりして。プールに、小学校にプールができたんです。青山師範の付属に。だけど屋内プールじゃないの、外のプール。そこにみんなが、氷に乗りに行くので注意が・・、誰か落っこって騒ぎが起きて。ちょっといろんなことありましたよ。加藤先生が。

向井：はい。ご著書（『合気道に活きる』）で拝読しました。

向井：その頃は、普段の筆記用具なんかは、鉛筆の時代ですか。先生の日常の筆記で、

多田：鉛筆だよ。

向井：そうなんですね。

多田：鉛筆でね、薙刀、あ、薙刀じゃない（笑）、あの、ナイフ。ナイフの研ぎ方なんかも習いました。

向井：そうなんですね。

多田：小学校 4 年くらいだったかな。

向井：学校で・・

多田：ああ。工作の、工作教室、付属だから割と設備やね。大学の付属、青山師範の。今は学芸大学、東京学芸大学（附属）世田谷小。青山師範学校、東京府立なんです。だから設備はコンクリート建てで、それで冷暖房、冷房はないけど暖房はとてもいいんです、蒸気暖房でスチームが入って。ひとクラス 48 人。小学校は、最初は 1 年から 3 年まで 48 人のクラスで、男 48 人で、4 年になるときに男クラスが一つ増えた。だから少ないんです、一学年。100 人前後しかいないから。いや、だから一学年いないですよ、100 人。

向井：その小学校は付近の方は皆さんそちらに・・

多田：いやー、あの、その辺一帯からずっと、制限があったらしいけど。それからくじで入ったから、試験やなんか・・、そらぁだって希望者が多いから。

向井：えっ、試験じゃなくて・・

多田：えーあの、試験です。試験プラスくじ。

向井：ああ、なるほど。先生も受験されて。

多田：そうです。

向井：そうなんですね。その頃、小学校は男の子は、男の子ばかり（のクラス）で・・

多田：青山師範学校は（そうだった）。一般の学校は一緒だったんです。

向井：そうなんですね。もう先生が学校に行くと男の子ばっかりがいる・・

多田：そうそう。だから女の子のクラスのことを、僕はほとんど知らない。6 年間一緒でも、ほとんど・・。川やなんかは（一緒に）やってます、ただ日常で話したり、そういうことはしないから。だから、青山師範にいた人が、早稲田で一緒になったりしたときに、こんにちは、っていうから（驚いた）、全然、（わからなかったので）。なんていうか日常では、うん、付き合ったことなかったから。それで、彼女たちは、（小学校を）出たら女学校入ったり（別の進路だった）。

向井：はい。

多田：あの頃、共学って珍しいんですから。

向井：だから同じ建物には通っていても、顔はあまり合わせないわけですね。

多田：そう。それで親しくなったのは、出てからです。クラス会を一緒にやろうと言うんで。

＊幼少期の習い事

向井：先生は小学校の頃に書道と、絵を習われて。

多田：ああ、習ってました。書道は学校の、青山師範のすぐ前に文房具屋があるんです。その 2 階に村田先生といって、我々に書道教えてた先生が年配の師範学校の書道の教授で、そこに習いに行きました。それからウチのそばのところの、自由が丘の奥にも、書道の教師、個人の家（が）あって、習いに行ってました。それから絵描きさんは、どうして（通いたいと）親に言ったんだか、わからないんです。私は特に絵が好きだった覚えはない。なんで行かされたっていうか。自由が丘から大井町線で荏原町（えばらまち）出るまで行く。そこからバスでまた 10 分ぐらい行って、そこにアトリエのある家なんです。有名な人だったんです、大きなアトリエだった。

向井：はぁぁ。

多田：どこだって言われても、それで誰だって言われても、わからない。母親も早く亡くなってしまったし。その時のものも、おそらくあったんだけども、自由が丘のウチをやる（処分する）とき、そんな細かいことはわからないから。なにしろ何一つに捨ててない、昔の人は。手紙から何から全部取っちゃう。（それを）全部処分しちゃったから、もう今は（ない）。

向井：そのとき、描かれてたのはどういう絵だったかは・・

多田：どういう絵って、いやあの、ギリシャの彫刻みたいなのをデッサンしてやったけど。

向井：そうなんですね。本格的な。

多田：そうそう。だから、ローマに行ったときに時間が余ったら、アカデミア（に）ちょっと行って、入って、デッサン描いてました。日本人の、隣で、有名な何とかさんという画家がいました。彼も生徒じゃないから、そのデッサンの。本職に混じって、そういうの描いたりして。嫌いじゃなかった。

向井：では、書道が週に 2 回くらいで、デッサンが 1 回ぐらい。

多田：週に 1 回。だけどそれは毎週かどうかは覚えてない。なにしろ結構、遠かったんです。大井町線っていうのは、大井町ね、二子玉川の間って、今、田園都市線と結んでいるけど、ちょっと寂しい電車なんです、前は。

向井：それは 1 人でいらっしゃるんですか。

多田：ええ。それでたしか荏原町だったような・・、そこからバスで、それはまた、なかなか来なかったし、学校から帰ってきてから行くわけだから、あるいは日曜日行ったか、よく覚えてない。なんで行ったのか、どうして絵を習ったのか、覚えてないんです。はい。

向井：どちらの習い事も、小学校の間はずっと行かれてたんですか。

多田：いつまで行ったかっていうのも覚えていない。

向井：わりと小学校に入ったくらいの小さい頃から始めて・・

多田：ああ。それで中学へ行くときは、そろばんもあるし、小学校で（終わったと思う）。

向井：はい。

多田：それで、うちのすぐ後 100m ぐらいのところに松本先生という、なんか女学校の先生だったところで。ここ（30 畳弱）の半分くらいの部屋かな。そこで、2 人か、3 人か、多いときでも 4 人しかいない。そこへ・・あれはなんだったんだろう、一応行ってそろばんでやったり、それから数学や、それから、話し方を・・、それから本の音読やなんか、読み方を、うん。

向井：はい。今で言う塾みたいなものですね。

多田：そうそう。家庭の塾。大勢で、がーっと（勉強）するのではなくて、2 人とか 3 人とかね。はい。

向井：結構、学校に行かれてから、あの、学校帰られてから習い事が割と忙しい・・

多田：うん。もうだけど中学入った頃には、もうほとんど行ってない。

向井：そうなんですね。

多田：どこも行ってない。だって中学入ったときは戦争だからね。戦争中だしね。で、父親は（出征して）もういないしね。なかなか、大変だった。

＊中学生時代の満洲旅行と戦争
多田：これ（写真アルバムを示して）満洲ですよ。

向井：こちら（写真 7～11）も満州ご旅行のときの・・

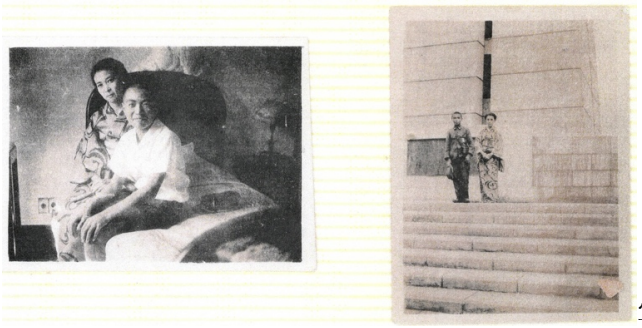
写真 7(左)、写真 8(右)

写真 9(左)、写真 10(中)、写真 11（右）

多田：この写真を撮ったのは父親です。だから僕と母親しか写ってない。ヤマトホテルかどこかだったと思います。あの頃、満鉄の、アジア、特急アジアで新京から旅順まで行ったから[5]。

向井：その頃はまだ戦争中でも、こうしてご旅行ができたんですね。

多田：昭和 17 年、前の年にアメリカと戦争が始まって、だけど行けたんです。簡単には・・（いけなかったはずだろうけど）、どうして行けたか、許可があったのか、（当時は）中学 1 年だから、（詳細は）分からないですが。とにかく母親が切符をどんと買って、そして、その時父親は、満洲の長春、新京の郊外に、236、216 だったかな、兵站地があって。昔、大学出て徴兵になると大抵、主計になるんです。主計少尉。東大出て、東京帝大出て。まあ、要するにそうすると、前線行かないわけです。タマとかそういう（物資補給のための）大きい兵站地が新京の郊外、まあ東京で言えばすぐ郊外ですよ。だから、内地にいるのと同じだったんです、父親が。

向井：なるほど。

＊家庭での信仰や宗教の経験

向井：先生をお小さいときのお話で、何か、お家に仏壇と神棚とかでお祀りは・・

多田：神棚ね、親父の最初、あの家（自由が丘）を買ってそこ入ったでしょ。

向井：はい。

多田：それで小学校のときに、家に神棚も仏壇もない人と（言われて）、僕、手あげたんです。はい、って（言って家に）帰って。ちょっと、次の日から大工が入ってきて神棚

[5] ヤマトホテルの整備は、満鉄の業務内容を定めた明治 39（1906）年の三大臣（外務、大蔵、逓信）命令書第 3 条に《主要な停車場に宿泊…施設をつくる》と盛り込まれた。ヤマトホテルは、明治 40 年 8 月、大連にロシアがつくったダルニーホテルを改修して開業したのを皮切りに長春、旅順、奉天、ハルビンなど、満鉄沿線の主要ターミナルやリゾート地に 16 のホテルが次々とオープンする。産経ニュース Web「世界一流のホテルをつくれ！　満州を代表する「ヤマトホテル」はこうして誕生した…」2016 年、10 月 30 日、https://www.sankei.com/article/20161030-RZN3YEYPFZIVHJCXAGHL4DGIQ4/　、2025 年 11 月 10 日最終閲覧。

作って。

向井：あ、そうなんですね(笑)。

多田：(笑）茶の間に。

向井：はい。

多田：それで大工がドンドンドンとやって、天井板がボーンと抜けて、僕は笑ったの覚えてる。

向井：ええー（笑)。

多田：どうして（そうなったのか)・・。あの、ウチ、神道なんです。

向井：はい。

多田：それで、江戸時代、幕府の政策で、神道と仏教（を)、武家が（信仰した)。それで、禅なんです、(多田家は）曹洞宗だから。

向井：はい。

多田：だけども、おじいさんのウチに（仏壇が）あるんです。あっちにあるからいいんだって、言って。

向井：そうなんですね。

多田：だってね、ほら。

向井：ああ、そうですね、本家でね、はい。

多田：まだ、(代が）替わってないんですから。だけど、私は手挙げてそう言ったから、慌てて作ったんです。仏壇は、ここ（月窓寺）と関係してる（宗旨)。だけどお墓はちゃんと、戦国時代からの、対馬の曹洞宗の太平寺（たいへいじ）というところに、ウチの屋敷の前に、あるんです。山のてっぺんの 2 ヶ所にあるんです。今のうちよりずっと大きい、お墓の方が。

向井：はぁー。

多田：昔は土葬だから。

向井：はい。

多田：江戸時代の時代劇で、何々家の墓って出てくるのは絶対ありえないんです（笑）。土葬で（笑）、一人ひとつなんです（笑）、か、あるいは、夫婦なんです。こうやって、大きな山の上までの、もう今はできないです。うん。大きな石を、ずーっと（並べて）、あるんです。

向井：お墓参りにいらしたりとか・・

多田：あの、コロナ前までは、9 月に。だから大変なんです。

向井：遠いので、

多田：飛行機で福岡行くでしょ、福岡から。乗ったらすぐだけど、100 キロしかないから。

向井：ええ、ええ。お小さい頃とかはどうでしたか。

多田：行ったことありませんでした。

向井：ええ。なかなか行けない（距離）ですよね。

多田：僕だって、（行ったのは）ずっと後になってから。いろんなものを整理して。あることは知ってました。

向井：はい。

多田：だけど不思議なのは、初めて行ったとき、こう、お寺行って挨拶して。ええ。だけど挨拶と言ったって、そのときはお寺（を）まだ、知らないから。山の中にあることは知っていて。こう、上がって行って、高い山で鬱蒼としてるんです。だけど、1 回で行く道は、もうたくさんあるんです。それで下の方はジャングル、南洋の方の遺跡のようにジャングルの中にこう、墓がひっくり返ったりしてるんです。明治維新以来入ったことない人もいる。それで、侍ほど上の方へ（お墓を作っている）、その山の。（私は）1 回で行き着きます。大体そうです。どうして行けたんだろうか（不思議なことです）。それで、（お墓は）昔の多田何々というのではないんです。法名が書いてあるんです。

向井：はい。

多田：はい。それで女の人は何々禅尼、禅院であるとか、昔の、家老だった頃。（中略）自由が丘のウチは、春と秋、お彼岸の日、隣のすぐそこに熊野神社というのがあって、そこの神主さんに来てもらって、祝詞をあげて、もうあれを作って、いろんなお供えをして、それで玉串を神主さんから受け取って、それは必ずやっていました。先祖祭（せんそさい）というんです。それで、後ろに、絵像（えぞう）をずーっと、こう、絵像を（掛ける）。（絵像は）一つ、この中（『合気道に生きる』）に出てるけど。昔は（多田家の当主）ひとりに一つあったんです。全部。絵像、あの、掛け軸。西洋で言う肖像画です。だけど明治維新で、だいぶ失くしました。何人かは残っています。それをかけて。だから宗教はないわけじゃないんです。ちゃんとあります。だけど、それをやりだしたのは、おじいさんが、僕の母が亡くなって、ちゃんとあれ（供養）をするようになって、本家を（継いで）、当主、多田家の当主になってからちゃんとするような。

向井：それまでは、おじい様がなさってて。

多田：そうそう、そうそう。（中略）だからどちらかというと、子供の頃はあまり宗教とか、そういうのはなかったんです。

向井：そうなんですね。

多田：大きな宗教だなぁーと思ったのは、僕のおじ、うちの母方の荒井健太郎、枢密院の副議長、あのときは、お葬式、大々式だった。荒井のウチに行ったとき。こう、小学校 2 年生だから。そしたら、すぎって（いう名前の）女中頭なんだけど、（がいて）、近衛さんの・・、近衛文麿、（彼が）私的に挨拶に来ていました。それでお葬式なのにすっごい豪勢だなぁと思って。伝通院でやったから、その時は、私は風邪引いてしまって、小学校、子供だからいいからっていって（学校を休みました）。その後のいろんな会や何かは別に、どこやら何ら、大勢の、どこの店だったかなぁ、あの当時の、大きな料理屋だけど、そこでやったのは覚えています。宗教関係はそのぐらい。あと、多摩墓地。

向井：はい。

多田：お墓行ったんです。それで荒井健太郎、正二位勲一等荒井健太郎の、大きな松があって、それでこっちに荒井家の墓地があって、栄誉地区っていうとこなんです。それで、偶然なんだけど、そのじいさんの方の栄誉地区のすぐそばに宗教の川面凡児（かわづらぼんじ）、禊の、変わったお墓がある。今でもあります。だから身近なお葬式って、一番感じたのは、荒井の、母親の（方の祖父）、それから、母親の葬式です。昭和 18 年に、中学 2 年のときです。うん。それからちょっと、感じが変わります。

多田：お墓とか宗教とか、それで、全部ちゃんとしなきゃと思って、僕は行きだしたのは、ヨーロッパから帰ってきて（から）、対馬のお墓を、整理しなきゃ（と思って行っ

た)。(中略) まあ、何しろ、本当に (宗教や信仰などを) ちゃんとして、こうやりだしたのは、(後年のこと)。早稲田でこう、あれして、(そういう認識が) 変わったのは植芝盛平先生とか中村天風先生とか一九会を、同じ年に、(始めたのがきっかけだった)。

向井：はい、ええ。

多田：昭和 25 年、3 月に植芝盛平先生に入って、それでそこで、中村天風先生という人を知ってますかって、横山優作さん、海軍兵学校で終戦になって、合気道やってきた、一橋大学で、ちょうど春休みだったから、私はそれで、はっと (興味を惹かれて) 聞いたのは、天風先生の話なんかを聞いたのは、子供の頃、我々、本は、ものすごく読んだんです。今でもふじやという本屋は、自由が丘の駅の真ん前にあります。(注：インタビュー後の 2025 年 2 月 20 日に閉店[6])

向井：そうなんですね。

多田：そこはもう、行って、これ (本の購入を) 多田のあれでって言ったら、後払いだから。講談社の、いろんな、ありとあらゆる世界の名作とか、それから、明治時代から武芸物というのがあるんです。

向井：はい。

多田：日清戦争や日露戦争や、それから、仮想敵国として、あの時代からです。普通にアメリカやイギリスは、その冒険小説です。それで黒将軍快々譚とか、そういうのを見たら、それ中村天風先生がモデルなんです。コサック騎兵に、網をバーっとかけられたなんていう、そういうの。それから鞍馬天狗なんかも、大佛次郎が天風さんの話を聞いて、あれ書いたって言われてるんです。そしたら満州ね、昭和 17 年 (に) 行ったでしょ。そのときハルピンまで行ったんです。その上にチチハルってある。もう、そこは危ない。何が起きるかわからない。ソ連が (近いから)。で、ハルピンの郊外に沖、横川の志士の碑というのは、これ、ここ (『合気道に生きる』) に書いてある、それ軍事探偵で、ロシア軍に捕まって銃殺されたときの志士です。その時。その、横川、沖禎介 (おきていすけ) っていうのは、目隠しを。横川はキリスト教徒だから、キリスト教で軍事探偵だったんです。沖禎介は、五島列島 (にいた人)。五島列島の家老していた林というのは、僕のおばの夫なんです。おばは再婚なんだけど。その沖禎介が、五島列島のおじが管理しているところの島の住人だったんです。ものすごい暴れん坊で、彼が軍事探偵を志願していなくなったんで、みんな、村中が安心したっていう、うん。これで (彼の) 首を打たなくっていいっていうような、そういう話がある、ふふふふふ (笑)。そういう話があ

[6] 産経ニュース「東京大空襲も乗り越えた 102 年の歴史に幕　自由が丘駅前の不二屋書店・門坂直美さん」https://www.sankei.com/article/20250217-75JCLRUJZRIWDHPZROOOV6TIQU/、2025 年 11 月 8 日最終閲覧。

って、そうしたら早稲田に入ったら、それと関係のある天風さんが、まだ生きていて、心身統一法といって（実践していると知った）。

＊イタリアでの合気道海外普及
向井：合気道を海外に普及に行く最初のときが、その片道切符でとか、あと・・

多田：それは藤平さんが、なんかそうやって（決めた）。片道切符で、一人で行け、二人で行くと、どうしても相手を頼る（から）。

向井：アルバイトしない、って。

多田：ええ。それから、片道で行く。そうでないと嫌になると、人間帰っちゃう。それから、だからと言って、向こういってバイトをすると、そちらのバイトが主になって、指導する・・（中略）これ、絵描きには絵描きの生活があるんだっていう人がいましたけど、確かにそうです。（中略）ヨーロッパで修行するには、友達ができないとダメだなぁ。同じぐらいの年代の（友達）が、僕は行ってみると、ケルキーニ、ソルジエ・・、7、8人がぱっと同じ年代の友達に、すぐになったんです。（中略）気があうかです。一緒に、そういう風なの（友達）が手伝ってくれて。そうすると彼らが紹介してくれるわけです。ここに（稽古ができる）こんな場所がある（ということを）。（中略）ものすごく親日的なんです。イタリアというところは親日的だったからやりやすかった、これは確かにあります。フランスなんかは、難しいだろう。（フランス領だった）インドネシアは、日本が攻め入ったから。イタリア・・、向こうがナチスに占領されているときに日本が入ったって言って、それを恨みに思ってる人はいっぱいいるから、うん。オランダもそうです。イギリスもそうです。ロンドンへ何回か行ったけど、私、日本の捕虜でしたって、日本語で言った人（と出会ったことが）、何回もありました。ああ。

向井：へぇぇ。

多田：だからどうっていうような（ことは）言わないけど。うん。やっぱり、（合気道の国外普及は）ただ技術をあげるっていうよりも（歴史や文化も関わる活動になる）・・。まあそれから、イタリアの場合は、戦争中にイタリア大使館におられた、本にも書いていた、メルジェさんという人が、東洋語学校、イズメオというのだけど、イズメオで日本語を教えていた。その弟子が入ってきた。（中略）その人に行ってすぐに会えたっていうのが大きかったなぁ。そうすると、彼が多田っていう人が来たぞって、その授業のときに話して、それを聞いて。その時代の、あのメルジェさんという人はとっても大先生を尊敬された、大先生は素晴らしい、って。これこそ本当の日本文化だって、イズメオでいつも話してくれた。そこの弟子が来たって言うんで、みんな来てくれたんです。それがきっかけで、少しずつ、少しずつ。経済的には難しかった、最初。生活なんかはできる。だけど、身代（しんだい＝生計）ができると、そうすると、例えば、講習会だな。

相当、当時の費用で何百万とかかるんです。そんなの持っていないから。（日本からの）持ち出しが 350 ドルだったから[7]。

向井：ええ。

多田：電話一本で貸してくれた。サインも何もなしで。今度これやるんだけど、じゃあ、いくら、って。ぽんと貸してくれる。ちゃんと返しますよ。（貸すときに）サインもしなけりゃ、何もしない、担保もない。電話一本で貸してくれる。日本では考えられない。

向井：はい。

多田：ね、うん。それで講習会をやるのを準備した。おかしな人間もいるけど。・・・うまくいった方かどうかは分からない。うまくいったようなことは、こう言うけど。ふふふ（笑）。日本でこれやってたら大変です。僕は母親がいないから。母親、中学 2 年のときに亡くなったから。大学・・、ウチの親類の関係じゃ大学っていうのは東京帝大を言うんだって思ってるのが XXX。（親類が）みんな、そうだから。山崎のウチなんかは、銀行系だから。ふふふふ（笑）。空手、合気道、ＸＸ や、まったく、あーぁ、とんでもない（という環境だった）。

Ⅲ　おわりに

本稿では、当該インタビューより、合気道を日本の伝統文化を背景とした「芸術」と捉えて実践している多田が、そのように合気道を捉えるようになる以前の生育環境がどのようにあったのかという視点から、「戦前の暮らしと小学校の環境」、「幼少期の習い事」、「満州への旅行」、「家庭での信仰や宗教の経験」について語られた部分を構成した。生活環境に関しては、今日のように都会化されていない東京の暮らしの一面が語られており、生活者の視点から日本近代における都市部の生活環境が激変したことが示されている。書道やデッサン、家庭的で小規模な塾に通ったことや、デッサンについては、後にイタリアで合気道普及に努めた折にも取り組んだことも語られた。満州旅行については会社勤めの父親が戦場へ赴き、そこへ旅行に行くという、今では容易に想像し難い経験が語られ、家庭での信仰や宗教の経験については、信仰や宗教について比較的おおらかであった環境や幼少期の冒険物との出会いが、日本伝統文化を背景とする「芸術」へ至る以前の幼少期の道筋にあったことが示された。また、「イタリアでの合気道海外普及」では、理解を示すイタリア人との信頼関係のありようが詳細に語られている。

本インタビューは、同時代の「日本」「や「日本文化」、「日本文化を背景とする美術お

[7]　1963 年 4 月 1 日以降年間総額 500 ドル以内の業務渡航が承認され、1964 年 4 月 1 日以降は観光渡航も年 1 回 500 ドルまでの外貨持出しが自由になつた。『昭和 43 年度運輸白書』第 3 節　国民の海外渡航の状況(https://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/shouwa43/ind120403/frame.html)、2025 年、11 月 17 日最終閲覧。また、当時の為替レートは 1 ドル 360 円固定相場だった。

よび芸術」といったものを考察する手掛かりとなることを意図して実施された。この数年においても、例えばAIが急速に普及するなど、社会の変化が著しく、日本の少子化は進み、在留外国人は増え、海外にルーツを持つ子供たちが日本で育つ現状もある。そのような時代の「日本」や「日本文化」、それを背景とした「美術」や「芸術」を考える際には、江戸以前の日本の独自性に注目するだけでなく、日本近代におけるその歩みや変容を見ることが必要となろう。そのような視点からも、合気道を日本伝統の「芸術」として実践するインタビュイー自身の言葉が残る本稿は貴重な記録である。

参照文献

多田宏『合気道に活きる』日本武道館、2018年。

多田宏『生命の力を高める呼吸』世界文化社、2024年。

向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム: 「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022年。

向井晃子「日本伝統文化を背景とした「芸術」と「観想」 ―合気道家多田宏の稽古の言葉より―」年報 Promis,3(1)、神戸大学、2025年、77-85頁。

向井晃子「日本文化を背景とする「芸術」への岐路－合気道家多田宏インタヴュー－」年報 Promis 1 (1)、神戸大学、2023年、123-139頁。

〔附記〕本稿のインタヴュー調査実施にあたり、多田宏師範、合気道月窓寺道場、雲洞山月窓寺、各機関でご対応いただいたご担当者の方々、月窓寺道場生の皆様方にご協力を賜りました。末筆ながらここに記し、深くお礼申し上げます。